

性差を考慮した研究開発の推進
(共催研修について)

2025/1/16

日本医療研究開発機構
研究開発統括推進室 研究開発企画課

共催研修(25/1/28 開催)

- 日時: 2025年1月28日(火)13:00~15:00(開場:12:15 予定)
- 会場: 大手町プレイスホール&カンファレンス HALL(<https://otemachi-place-hc.jp/access.html>)
- 定員: 450名(オンサイトのみ)
- 参加費: 無料
- イベント名:

性差を考慮した研究開発の推進

~健康・医療分野における研究開発において、性差の視点を組み込む~

(国立研究開発法人日本医療研究開発機構、一般社団法人日本医学会連合、

日本脳科学関連学会連合、生物科学学会連合 共催)

■参加申込

(参加申込用 URL) <https://forms.office.com/r/ERnWL1r7q7>

(参加申込期限: 1月23日(木)正午まで)

なお、定員を超える場合は、申し込み先着順とさせていただきます。参加可否については、【1月24日(金)】にご連絡するようにいたします。

■本件問い合わせ先

国立研究開発法人日本医療研究開発機構

研究開発統括推進室 研究開発企画課

担当: 鶴見、塩澤、北川

TEL: 03(6870)2333

E-mail: kaihatukikaku@amed.go.jp

■イベント概要

「第6期科学技術・イノベーション基本計画(令和3年3月26日閣議決定)」、「第5次男女共同参画基本計画(令和5年12月26日一部変更閣議決定)」において、性差が考慮されるべき研究や開発プロセスで性差が考慮されないと、社会実装の段階で不適切な影響を及ぼすおそれもあるため、体格や身体の構造と機能の違いなど、性差を適切に考慮した研究・技術開発を実施していくことが求められている。

医療分野の研究開発においても、性差を考慮した研究開発の推進が期待されること、本イベントでは、性差を考慮した研究開発の実施にあたり参考となる海外の資金配分機関や著名な論文誌の取組、さらに、性差に基づいた知的創造や技術革新(ジェンダーイノベーション)の概念などを紹介する。

(参考/AMED 関連 HP <https://www.amed.go.jp/program/list/18/01/seisakenkyu.html>)

■プログラム

時間	所要時間(分)	テーマ	演者	座長
13:00-13:05	5	開会挨拶	三島 良直 (AMED 理事長)	-

13:05- 13:10	5	開会挨拶	門脇 孝 (日本医学会連合 会長)	-
13:10- 13:15	5	開催趣旨	平川 誠也 (AMED 研究開発企画課課長)	-
13:15- 13:30	15 (質疑 込)	① ジェンダード・イノベーションとは～性差/交差性分析がもたらす科学技術の発展～	佐々木 成江 (横浜国立大学 客員教授・学長 特任補佐/東京大学 特任准教授)	磯 博康(日本医学会連 合) 岡野 栄之(日本脳科学 関連学会連合)
13:30- 13:45	15 (質疑 込)	② 脳の性差とジェンダードイノベーション	大隅 典子 (東北大学 副学長/付属図書館 長/教授)	岡野 栄之 塩澤 久美子(AMED 研 究開発企画課主幹)
13:45- 14:00	15 (質疑 込)	③ 性差を考慮することの重要性: 性差医学・医療の立場から	片井 みゆき (日本性差医学・医療学会 理事 長/政策研究大学院大学 保健管 理センター 所長・教授)	北川 雄光(日本医学会 連合) 塩澤 久美子
14:00- 14:15	15 (質疑 込)	④ 性差を考慮した研究開発に求められるものと今後の課題	本間 さと (日本医学会連合 業務執行理事 /慶愛会札幌花園病院 睡眠医療 センター長)	北川 雄光 高橋 良輔(日本脳科学 関連学会連合)
14:15- 14:25	10 (質疑 込)	⑤ 性差に配慮した研究開発の世界の動向について(オンライン)	小泉 周 (自然科学研究機構 特任教授)	高橋 良輔 平川 誠也
14:25- 14:55	30	パネルディスカッション: 性差を考慮した研究開発を推進するにあたっての課題、課題解決に必要なこと	ファシリテーター:大隅 典子、高橋 雅英(日本医学会連合 副会長/ 藤田医科大学 国際再生医療セン ター長) (五十音順) ディスカッサント: 片井 みゆき 小泉 周 (オンライン) 佐々木 成江 鶴見 晴子(AMED研究開発企画 課調査役) 本間 さと	
14:55- 15:00	5	閉会挨拶	高橋 雅英	-
	120	合計時間		

■抄録

〇氏名： 佐々木 成江

〇所属： 1. 横浜国立大学 ダイバーシティ戦略推進本部 客員教授/学長特任補佐(ジェンダード・イノベーション担当)

2. 東京大学 大学院理学系研究科生物科学専攻 特任准教授

〇演題名： ジェンダード・イノベーションとは～性差/交差性分析がもたらす科学技術の発展～

〇抄録：

ジェンダード・イノベーションとは、性差に基づくという意味の「ジェンダード」と技術革新や知的創造を意味する「イノベーション」を組み合わせた造語であり、欧米を中心に組み込みが広がっている。これまでの研究や開発では、男性が対象や基準となることが多く、性差が見過ごされがちであった。例えば、生命科学の分野において、女性は妊娠や出産の可能性や、性周期によってデータが変動しやすいために、男性が実験の対象となることが多い。さらに動物実験でも同様にオスが多く使われている。そのため、女性の健康に関するデータが乏しくなっている。このような研究や開発自体に埋め込まれているジェンダーバイアスは、生命科学分野のみならず、工学や環境科学などの分野でも蔓延している。ジェンダード・イノベーションでは、今まで見過ごされてきた性差を新しい視点としてとらえ、様々な科学技術の研究や開発のプロセスに性差分析を積極的に組み入れることで、研究の創造性を刺激し、新しい発見やイノベーションを目指している。さらに近年では、性自認、年齢、障がい、人種、民族、地域性、経済的状況などとの交差性も考慮して分析することも重要視されている。本講演では、ジェンダード・イノベーションについて具体的な事例を挙げながら紹介したい。

〇氏名： 大隅 典子

〇所属： 東北大学 副学長(広報・ダイバーシティ担当)、附属図書館長、教授

〇演題名： 脳の性差とジェンダードイノベーション

〇抄録：

本講演では、医学生物学的視点より、脳や神経系の性差の理解と、それに基づくジェンダード・イノベーション(GI)の重要性について論じる。かつて脳の性差について論じることはタブーであったが、20世紀終わり頃からの脳イメージング解析技術の進歩に伴い、脳の性差に関する医学生命科学研究は近年、飛躍的に進展し、男女の脳には構造的および機能的な違いが存在することが明らかになっている。これらの性差は、認知能力や行動パターンに影響を与え、医療や教育、技術開発において考慮すべき重要な要素である。また従来、医薬品の開発において、実験動物や細胞における雌雄差に注意が払われず、雄や男性を対象とした研究成果や治験結果が女性に適用されることが多く、これが健康リスクを引き起こす要因となっている。鎮痛剤の効き方の男女差についても知られているが、痛みの処理では、男女で異なる細胞や神経回路が関わることで明らかになってきたため、今後は、男女の生理的な違いを考慮した医薬品開発や個別化医療が求められる。脳や神経系の性差とGIの関係を理解することは、科学技術の発展だけでなく、社会全体の公平性や持続可能性を高めるためにも不可欠であり、性差を考慮したアプローチの推進が、未来の科学技術における重要な課題であることを強調しておきたい。これは単なる「性差医療」にとどまらず、マジョリティ側から気づきにくいマイノリティ側の視座から見直すことが、医学研究上のブレイクスルーに発展する可能性にも繋がることになる。本講演を通じて、参加者が脳の性差とGIの重要性を再認識し、今後の研究や実践において積極的に取り入れていくきっかけとなることを期待する。

〇氏名： 片井 みゆき

〇所属： 日本性差医学・医療学会 理事長 / 国立大学法人 政策研究大学院大学 保健管理センター 所長・教授

〇演題名： 性差を考慮することの重要性：性差医学・医療の立場から

〇抄録：

性差医学・医療は、①生物学的性 sex、②社会的性 gender、③ライフステージに伴う性ホルモン分泌変動の性差が、健康や疾患に与える影響を研究する分野であり、男女および全ての性を対象に、個々の患者に最適な医療を提供するために重要である。性差医療は、一人ひとりに合う個別化医療 personalized medicine や精密医療 precision medicine に至る、身近な最初のアプローチと言える。

性差医学の成り立ちを振り返ると、1960-70年代に妊婦が服用した薬が出生児に影響を及ぼしたサリドマイド等の薬禍を受け、1977年以降は世界中で妊娠可能な女性を薬剤試験に組み込むことが原則禁止される措置が取られたことに遡る。これは重要な措置であったが、女性生殖器・乳腺悪性腫瘍以外の生理医学的研究が主に男性を対象として行われた結果として、女性特有の健康問題や疾患の治療に関するエビデンスが不足する事態となった。こうした失われたエビデンスを補完するためにも、性差医学・医療の視点が重要となった。

1980年代に米国から始まった性差医学の概念は、1990年代に欧米や日本へも導入された。2002年に日本性差医学・医療学会の前身である性差医療・医学研究会が設立、2006年に International Society of Gender Medicine(IGM)の初回学術集会在開催、その後も日本を含めた加盟各国で定期的に学術集会在開催され国際的に連携を取りながら、現在の発展に至っている。本講演において、性差を考慮することの重要性を、性差医学・医療の立場から具体的な取り組みを含めて紹介させて頂きたい。

~~~~~  
○氏名： 本間 さと

○所属： 日本医学会連合 業務執行理事、慶愛会札幌花園病院 睡眠医療センター長

○演題名： 性差を考慮した研究開発に求められるものと今後の課題

○抄録：

医学研究において性差は、年齢と並んで、常に検討すべき項目でありながら、結果のバラつきを避け、コストパフォーマンスを優先させた結果、「成人男性」が基準の医学研究、医療がまかり通ってきた。我が国も遅ればせながらその問題点に向き合うこととなったのは喜ばしいが、求められるものが何であるかは、未だに誤解や混乱があると思われる。本講演では、検討すべき諸課題のうち、以下の3点について述べたい。

1. 用語の適性について：性による差異があることを前提とする「性差」は、Equity、即ち平等・均等な検討を意味する「SAGER」との間にずれがある。また、日本語の「性」は Sex と Gender を区別していないため、解説が必要となる。誤解を生じる可能性のある用語をあえて使う必要があるかどうかについて問題提起したい。
2. 薬物の使用に関して：処方量における性差への配慮が著しく欠けている点について、問題視したい。特に臨床医が日ごろ活用する処方薬の添付文書には、小児、高齢者、妊婦への配慮がほぼ例外なく記載されているのに対し、わずかな例外を除き男女での用量の違いや、副作用の差異を記載したものはない。性に関する配慮の欠如は、研究開発段階からあり、多くの薬品開発が雄性動物のみを用いる傾向がある。
3. 動物実験における3Rの原則との対立について：SAGERが求める動物実験における両性での検討は、動物実験における3Rの原則に逆行する。一方で、SAGERは必ずしも、すべての研究で両性を同数揃えて検討することを求めているわけではない。動物資源を無駄に使用することなく研究を効率的に進める方策を検討すべきであろう。

~~~~~  
○氏名： 小泉 周

○所属： 自然科学研究機構 特任教授

○演題名： 性差に配慮した研究開発の世界の動向について

○抄録：

医学・生命科学領域をはじめ関連する研究開発において、生物学的な性(Sex)や社会的な性(Gender)をそれぞれ一つの研究開発の因子として捉え、それらを含む多様性に配慮した交差分析により研究開発を進めることが世界的な動向である。たとえば、世界において、米国 NIH(National Institutes of Health)は、2010年代中ごろより、“Sex as a biological variant”という主張を明確にし、基礎研究から応用研究にいたるまで、性差に配慮した研究開発を推進してきた。こうした動きは、Horizon 2020 や Horizon Europe といった欧州の研究開発においても同様であり、そうした動きの根源として、Gendered Innovation という概念がロンダ・シービンガー氏によって提唱されている。さらに、Nature 誌などの海外雑誌社は、SAGER(Sex and Gender Equity in Research)ガイドラインの順守を表明しており、論文の投稿時点でこうした性差への配慮がなされているか、論文著者にチェックを求めている。一方で、日本においては、性差といっても、それが Sex を指すのか Gender を指すのか混乱がみられ、性差への配慮については、研究開発においてその重要性があまり認識されていない。こうした現況について、昨年度の AMED の調査報告をもとに、世界の動向と日本における課題を整理する。

~~~~~  
以上